

正 誤 表

頁	行	誤	正
50	15	\bar{S} -delefion	\bar{S} -deletion
	16	\bar{S} -delefion	\bar{S} -deletion

Some Remarks on Language Acquisition and Linguistic Theory

大 野 純 子

1. 始めに

『言語』1986年12月号の「チョムスキー批判の現状」と題する小論に今井邦彦氏は以下のような一文を書いている。

このように考えて来ると、人が言語をいかなるものと見、
どの様な研究法によってそれに対するかは、究極の所その
人の資質・性向といったものによって決まって来るのだと
結論せざるを得ない。

この論文では、自分が何故generative grammarに魅かれたのか、又どのように今後言語にかかわっていきたいのか等を自分を振りかえりつつ考え、そこから生じる視点でgenerative grammar及び広く言語に関する諸感想を述べてみたい。

2. As a Oversea's Returnee

私が始めて英語に触れたのは、2才半の時、父の仕事の関係で渡米し、アメリカで生活するようになっての事だった。2才半の女兒といえ、一通りその母国語をあやつる事が出来るようになって、未だ猛烈な勢いで語彙を増やし、より複雑な構文を習得している段階である。即ち、まさに言語獲得能力が最大限に発揮されている時に、私は第二言語に接した訳である。私自身の記憶にはないが、親も驚く程の早さで英語を身につけ

ていったと言う。勿論、家庭内では、日本語しか使われていなかったにもかかわらずである。幸い日本語を忘れる事もなく、それから3年間の滞米期間中、私は、幼児語ではあったろうが、bilingual として過ごした。さて、日本に帰国後当時の事を述懐して母はしばしば次のような話をしてくれたものだった。

「皆があなたの事を不思議がっていたのよ。日本語で“こんにちは”と話しかけると、その後はずっと日本語で返事をするし、英語で“Hello ”と言えばその後ずっと英語で会話をするし……。よく頭の中でごちゃごちゃにならないものだって」

日系人の多いサンフランシスコという町に住んでいたためか、私は皮膚の色で相手が何語を話すのか、というような判断はせず、あくまで相手の第一声を待って、日英語を使い分けていたらしい。時に日本人のおじ様方が、最初に“Hello ”と言ってしまった為に、その後ずっと英語で話し続けなければならないはめに会われたこともあったと言う。

当時の事を私自身はもうすっかり忘れてしまっていたのだが、そのような話を聞いた時に、二か国語を使い分けるのはどういう事なのか、二か国語を並行して学ぶのはどういう事なのか、脳の中ではどのように区分されて、どのような仕組みになっているのか等、疑問に思っていた。

そういう訳でgenerative grammarに出会い、その研究の究極の目標として、「言語の普遍性」とか、「生得的な言語習得機構」の解明という課題に出会った時に、大変心に響くものがあった。そして自分自身の体験に照らし合わせて、以下のような憶測を勝手にたてたりもした。

もしcompetenceとperformance とに人間の持っている言語の能力が二分割出来るのなら、少なくともperformance に関しては、非常にパブロフの犬のような条件反射の要素が強いに違いない。私が「日本語」には「日本語」で「英語」には「英語」で素早く対応していた事実を考えるとそう結論づけざるを得ないだろう。

又、海外帰国子女同士の日本語での会話を聞くと、構文は日本語でも必要に応じて英語の単語を間に挿入して話すし、英語による会話でも単語のレベルでは日本語を上手くとり入れる。(最も、日本語特有の助詞の働きによるものか、日本文に英語の単語を挿入する場合の方が、その逆の場合よりも容易であるようだ。)この事から、lexical component とsyntactic component を比べてみた場合、syntactic component に関しては、英語と日本語はそれぞれ独立し自立して働いているが、lexical component (lexicon) の中では英単語と日本語の単語は、ごちゃまぜに存在しているのではないかと、想像してみたりもした。

「言語の普遍性」とか「言語獲得機構」の解明を研究目標としているgenerative grammar を勉強すれば、自分自身不思議に思う、自分の幼少時の言語能力をよりよく理解できるのではないかと思ったのである。

3. 現在のgenerative grammarについて

さて以上述べた私の視点から、generative grammarがどれ位「言語の普遍性」に近づいているのか、考えてみたい。

2才半の私は、日本語のsyntaxは大体身につけていたと考えられる。その事が英語を学ぶにあたってどのように役立ったか。例えば言語というものが世の中に存在しているという事。単語及び単語から成る文というものがあるという事を知っていたという事実は確かにadvantage だったかも知れない。しかしgenerative grammarの言う普遍文法の視点からすれば、生まれつき人間に備わっている何かが、私が始めて日本語という言語を学んだ際にも、第二言語として英語を学んだ際にも、「共通に役立った」と考えなければならない。しかし、残念ながら現在のgenerative grammarが直接的にその「共通する何か」の解明に役立つとは到底思えない。

確かに現在のgenerative grammarは初期の頃の標準理論よりは抽象度が高く、又一般性も高いと言えるだろう。英語の一つ一つの現象に一つ一つの変形操作を割り当てていた頃と比べれば、単純な操作と基本的原理によって言語現象を説明しようとしている現在のGB理論は普遍性に近づいたと言えるかも知れない。ただ、英語と日本語を並列して考えた場合、普遍性への道のりはまだまだ遠く暗いと言わねばならない。

その大きな原因は、generative grammarが、語順が定まっており、その語順によって、それぞれの文法的役割が決定される。configurational な「英語」という言語の特異性を特異なものと思わずことなく、それを中心に据えて、理論を展開している点にあると思う。

GB理論の中心的概念は、governmentであるが、これはX-bar theory を基に定義される。X-bar theoryは、以下のように定式化されている。

$$\begin{aligned} \text{a. } & X' = X \quad X''^* \\ \text{b. } & X''^* = X''^* \quad X' \end{aligned}$$

aにおいて X''^* はXの補部であり、bではXの指定辞となる。 X''^* がNPならば、aではXの目的語であり、bではXの主語である。即ち、主語・目的語という概念は、機能的に定義づけられており、中心となる語の右辺にあるか、左辺にあるかでその単語の文法的役割が決定されるのである。このX-bar theoryを基に、governmentが定義され、governmentからCase、 θ -role等が決定されるというGB理論の仕組みでは、なかなか日本語にも英語にも共通する言語習得にかかわる何か、という問題には光があてられないように思う。C-command というような概念は、英語のように語順の定まったconfigurational な言語を論ずる時には中心的役割を果たしえるだろうが、日本語のように格助詞を用いる事によって語順が比較的自由に変えられる言語にはどれ程有効なのか、直観的に疑問を感じてしまう。ただ、英語も日本語も包括的に扱える代案となると、

言語の最も基本的要素は何かという、より根源的な問題から考えねばならず、一般的な合意が得られる解答を見い出すのは非常に困難である。

4. GB理論・Barriers理論について

『GB理論は相互に連動して複雑な言語現象を正しく予測する一般原理の体系』（長谷川、1986、p.306）を目指しているが、その内容は過渡に抽象的で実際の言語現象と照合して経験的に判断を加える事が難しい。又、その一般原理も境界理論、統率理論、 θ -理論、束縛理論、格理論、制御理論の6つを含む為、とり扱う問題の範囲が膨大である。

一方、Barriers理論（Chomsky 1986）では基本となる問題は限定しているので、ここではChomskyの最近の新展開を示すものとしてこれを取りあげ以下で論ずる。

“Barriers”は、barrierという概念を用いる事によって統率理論と境界理論（即ち、変形或いは移動の問題）を統一して扱えないか、という試みである。

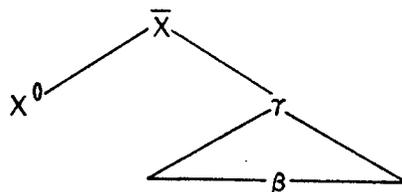
(1) $\dots\alpha\dots[\gamma\dots\beta\dots]\dots$

という構造において、 γ が β にとってbarrierであれば、 α は β を統率しないし、また β を α の位置に移動する場合、二つ以上のbarrierがあればそれは阻止されるというような γ を、上手く設定出来ないか、という問題を扱っているのである。

Barrierは

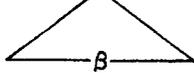
- a. L-markingを元にして 或いは
- b. Minimality Condition によって定義される。Barrier (a) を具体的に表わすと、（長谷川、1986、p.86~87参照）

(2)



(3) (2)の構造において、 X^0 はsisterである γ を「 θ -統率」する、と言う。特に X^0 が語彙範疇であるとき、 X^0 は γ をL-markする、と言う。

(4) $\gamma \neq \text{L-marked}$



γ が β を支配していて(γ 接点のすべてが β を支配している)かつ γ がL-mark, されていないならば, γ は, β のBCである。

(5) Barrier の定義

- (i) γ が δ を直接支配していて, δ が β のBCである。又,
- (ii) γ が β BCである。($\gamma \neq \text{IP}$)

いずれかの場合に限り, γ は β のbarrier である。

即ち, θ -government \rightarrow L-marking \rightarrow BC \rightarrow barrier という流れによってbarrier (a) は定義されるのである。

Barrier (b) は, (1)の構造において, もしより近い統率子がある場合には, 例え他の面で統率の定義は満たされていたとしても, α は β を統率しないという直観的思考を具体化しようとしたものである。これは, 統率子の曖昧さをなくす為の試み, 即ちある構造においてどの要素がどの要素の統率子であるかをはっきりさせる為の試みであるので, Barrier (a) とは異なり, 移動現象には関与しない。これは以下のように定式化される。

(6) $\dots \alpha \dots [\gamma \dots \delta \dots \beta \dots]$

(6)において γ が α を排除している δ の投射ならば α は β を統率しない。

即ち, barrier の方に主眼をおいて言うならば,

(7) γ が δ の投射, 或いは直接的投射で, β とは異なるzero範疇ならば, γ は β のbarrier となる。

という事である。

次にChomsky のbarrier 理論に対する評価を加えなければならない。Chomsky 自身も認めている事だが, 驚くべきことに, このままではbarrier 理論は, 非常に単純な以下のような疑問文を非文としてしまうのである。

(8) Who_i did [IP John [VP see t_i]]

(8)において、VPはL-markされないので、BCでありbarrierでもあり、又IPは(5)iによりVPからbarrier性を引き継ぎbarrierとなり、t_iから文頭who_iへの移動は二つのbarriersを越え、非文になってしまうのである。

これを救う為にChomsky VPへの付加というprocessを行う。即ち以下のような派生の過程をたどるのである。

(9) Who_i did [IP John [VP t_i ' [VP see t_i]]]

WhoはまずVPへそして次にCPのspecifierの位置へというようにsuccessive cyclic movementを行っていく。このような派生の過程を経ると、まずt_iからt_i'への移動は、VPはt_i'をexcludeしないのでbarrierとはならず、次にt_iからwho_iへの移動は、t_i'はVPに支配されていないのでVPはBCとはならず又IPがbarrier性を受け継ぐ事もない。従ってt_iからwho_iへの移動にはbarrierは存在しない事になる。

この分析は長谷川(1986, p.90)も指摘している通り、不自然で且ついろいろな非文をも許容してしまう。大体wh句は元々CPの先頭には生じるかVPやPPの先頭には決して生じる事がない。それなのに、自分のbarrierの定義を生かす為に、VPへの付加という理論の為の理論的操作を行っている。「……文法分析において、VPへの付加……というような過度に抽象的な(経験的根拠のない)かつ過剰能力をもつ仕組を許すことが、結局は、真に有効な理論を開発することにつながらない」(同 p.94)という長谷川の指摘は正に当を得ている。Chomskyの言語理論にしばしば見受けられる、理論先行の誤謬がここでも犯されていると言わねばならない。

5. 長谷川(1983)の理論

ChomskyのGB理論、及びBarrier理論に対して、具体的な例に基づき厳しい批判を繰り返している長谷川の提唱する“複雑度に基づく理論”の概要を以下で紹介する。

長谷川の複雑度に基づく理論は、変形適用を困難にするいくつかの構造因子を描出することから出発している。次にこれらの因子の和が2以上になると、非文になるという原則を経験的に示していく。構造因子となるものにはそれぞれ「複雑度1」(Degree of Complexity 1)を与え、その和が2以上になると非文法的という仮説をたてている。以下に、実際の内容を示す。

定義

…Y… [_{XP}…A…] …Y… (AはXPの一部 (XP properly contains A)) において、ある規則Rが、AをYの位置に移動するかまたはAをYとの同一性条件のもとで削除する場合、「AはXPから除去される」と言う。

非有界規則への一般条件

非有界規則の output は、「複雑度」2以上を付与されると非文法的になる。

複雑度を付与する構造因子

A. 範疇・機能条件

[_{XP}…A…] からAを除去する場合、次の条件を満たす各々のXPに対して指定されたDCを付与せよ。

- (I) XP=主要部を有する「-V」句 …………… DC1
条件 — XP=PPなら、(i) PP=修飾部かつ、
(ii) PP ≠ [_{PP} P [_{NP}…N…]]
- (II) XP = (Yを含まないある最大範疇ZP内の) 修飾部 …………… DC1
条件 — XPはAを直接支配していない。

B. 直接支配条件

XPとAが同一範疇であり、かつXPが、(i) Aを直接支配しているか、または、
(ii) Aを支配する最初のMC (主要文法範疇) であるならば、

- (I) A, またはAに支配されるBの除去 …………… * 非文法的
(II) A > BであるBの除去 …………… DC1

C. 時制文制約

構造: …Y… [_α…A…] …Y…におけるAとYへの規則Rの適用
…………… DC1
条件 — αはAを支配する最初の時制文 (最大のS) でありかつAはα内でNP
接点に支配されていない。

さて、以上のような非有界変形適用への統語構造条件による制約以外に知覚方法による制限をも長谷川は提出する。以下のようなものである。

知覚方法による制限

Output構造 A [_{S1} X [α…φ…] Y…]

- (i) $\phi = \text{gap}$ A = filler (例えば wh 句)
- (ii) $\alpha = \phi$ を支配する循環範疇, $Y = \alpha$ の sister(s) の処理に際して,
 - (a) A ... ϕ の区間は, 知覚上一つの閉鎖領域ないしは知覚単位 (closure or perceptual unit) を構成する。
 - (b) 従って output の容認度は, A ... ϕ の部分のみから S_1 の内容を再構成しうる度に比例する。

ある構文が上述の構造条件, 知覚方法の制限のどちらに依って規制されるのかという問題に関しては以下のように述べている。

「どの現象が構造条件により, どの現象が非構造条件により規制されるかをアプリアリに決める方法はない。ある現象の背後にある規則性が統語構造上の条件によって自然に簡潔に把握できる場合には前者により, そうではなくて異質の性質を示し, 別個の原則 (知覚の方式・意味等) によってしか, 自然で見通しのよい解決が与えられない場合には後者によって規制されると考えるのが妥当である。」

さて, 長谷川は自説の Chomsky の GB 理論に対する優位性を示す為以下のような例をあげている。まず, Chomsky は “say” 等の動詞は “ \bar{S} -deletion” を行ない, 一方 “lisp” 等の動詞は “ \bar{S} -deletion” を許さないという取り決めによって以下の文の文法性を判断している。

- (1) Who_i did he say that John met t_i ?
- (2) * Who_i did John lisp that he wanted to see t_i ?

一方, 長谷川によれば, 例えば, lisp 等の一般的に that 節内からの取り出を許さないとされている動詞でも, John が常に “lisp” する癖をもっているという知識が話し手・聞き手に共有されている場合は構わないという事である。即ち, Chomsky の \bar{S} -deletion という分析は「統語上の根拠はなく……統語論と意味論の混同に基づくもの」であり, かわりに以下のように分析する。

- (i) 統語上は, that 節からの取り出しは自由 (DC1 で OK)
- (ii) 疑問文への意味解釈として, 概略「wh 句 = 焦点, 残りの部分 = 前提 (= 旧情報, 新情報ゼロ)」が付与される。
- (iii) lisp, purr 等は複雑な意味内容をもつから通常は新情報に与えるために用いられる。

ここで, (ii) と (iii) に矛盾が起こり意味的逸脱が生じるが, lisp 等の情報量がほぼ

ゼロであるような特殊状況下では可能になる。

以上のように長谷川は、統語上の問題と知覚上の問題を分けて文の非文性を説明しようとするが、これは正しい方向と思われる。前にも指摘した通りChomsky は理論（特に統語上の理論）を重視しすぎてそれに片寄った分析をするきらいがある。いろいろな現語現象を偏向なく分析する事が望まれる。

次に、長谷川の複雑度に基づく理論についてであるが、これは長谷川自身も述べているようにoutputを、判断する条件である。文の派生の過程から生じる問題を扱っているというより、結果から判断するものである。従ってChomsky の理論よりも実際の言語現象には密着しており経験的であり、又、いろいろな因子の組み合わせの仕方でのいろいろな文の非文性に判断を下せるものである。しかし結果を重視しての判断の為、内容の説明は行っていないと思う。因子を描出する場合において、何かその背後に説明可能な要素があって、それが因子となるのかなど、いろいろな見方をもっと提示してもらいたかった。又、長谷川の場合は統語部門の移動現象に関する制約が主だが、実際には知覚上の制限等と運動して働く。長谷川がLF部門等に、同じ制約が如何ように働くと考えているのか、その他の枠組とはどのように関連しているとしているのか等、より明確にされなければならない点も残されている。

GB理論・Barriers理論がconfigurational な面のみから出発して理論を立てているのに対し、長谷川の理論は統語上・知覚上・意味上生じるそれぞれの問題を等しく扱っており、その面では実際の言語活動に近いものかもしれない。これが「言語の普遍性」にどのように接近しうるか、いろいろな問題がまだ残されているだろう。

6. 梶田の理論

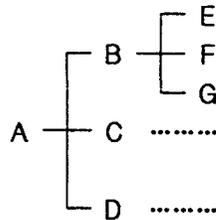
上記のChomsky 理論及び長谷川理論はChomsky の言語観を直接に受け入れ、それののちとして実際の英語の現象を理論的に論じたものである。一方、以下に示す梶田の理論は、Chomsky の言語観のそのもっとも基本的な部分は受け入れているものの、実際の言語習得観というものはかなり異なっている。以下で梶田（1986）を参考にそれを紹介し、その是非を考察したい。

Chomsky の言語観のもっとも基本的な仮説は、「言語習得という課題に直面した子供には、言語資料のほかに、なにか言語習得のための特別な仕組や情報が生得的に与えられている」というものであり、これは梶田も受け入れている。さて「生得的に与えられている何か」をChomsky は「成人の言語知識に関する情報」と考え、その情報の性質をいろいろ分析していったのである。一方梶田は、習得の結果得られる成人の言語知識ではなく、「習得の過程についての情報」が生得的に与えられていると考え、次のようにそれを示す。

- (1) 初期の段階で習得できる基本的な意味と表現手段がそれぞれ決まっいて、子供はそれらを組み合わせて資料に合うもっとも基本的な規則（あるいは構造、以下同様）を習得するものとする。この段階で習得できる意味と表現手段はどちらもかぎられており、それらを組み合わせた規則も比較的少数にとどまるものとする。この方式で習得される規則の集合を以下Xと呼ぶ。
- (2) 習得のある段階からつぎの段階への移行の可能性を定める法則が与えられているものとする。それらの法則はいずれも、「もしYという種類の規則がすでに習得されていれば、つぎの段階でZという種類の規則が可能になる」という型の法則とし、そのような法則のいずれかに合う場合にのみ、移行が許されるものとする。

さてこの梶田理論であるが、確かに言語の多様性を説明する理論としては、Chomskyのものより優れている。Chomskyは言語知識の内容の原理はどの自然言語にも共通のものである、という前提をしており、parameterの値が、例えば英語ならば+configurational、日本語ならば-configurational というように異なっていてその為実際の言語はかなり相違がある、というように把握しているのだが、その方式では個別言語の多種多様性にまで至らない。

梶田理論では、「初期の段階で習得できる基本的な意味と表現手段」が決まっているのみで、そこから無数に枝分かれしていく事が可能である。



上図のようにどの方向へも進む事が出来る。この言語習得理論は一面、真実を含んでいる。日本人の子供もアメリカ人の子供も初めは、「ボーユ（ボール）」というような幼児に発音しやすい単語を発話し、次に「ボーユ あった」“There's a ball”というような二語文へと進んでいくのである。即ち、初期の段階の言語習得は共通性が非常に高いのである。

しかしこの理論では、言語の多様性は説明出来ても言語の普遍性は説明出来ない。例えば、bilingualな人間が、英語の構造を知っているという事と日本語の構造を知っているという事に、何か相互作用のようなものが働いているのか、それとも全く別々に独立した知識なのか、というような問いには、答えようがない。一般に言語を研究する人

達の究極の関心事は、「人間が言語をあやつるというのはどういう事なのか」という点にあると思うが、そのような関心を持つ者にとっては、この問題はかなり興味をひく事象なのである。

言語の普遍性と多様性は相対する問題で、その両者を包括できる理論を創造するのは非常に困難な問題である。経験的フィードバックを要求されるとなればなおさらである。しかし、真に有効な言語理論を構築しようとするものは、常に両者を射程内に入れておかなければならない。

7. 幼児の言語習得について

1985年「言語」11月号の“ビジンとクレオール”の話の中で、以下のような指摘がある。（「ビジン・クレオールと言語のルーツ」 寛壽雄 pp. 76～79）

……言語発達の第一段階として、(1) 一歳から二歳頃にかけての幼児の発話、(2) ビジン、(3) 言語環境を奪われた子供の発話、(4) 訓練を受けたチンパンジーの発話が、が考えられ、それは第二段階、即ち(5) 二歳余以降の子供のことはやクレオールに対するものとされる。

その例として、以下のような幼児語が示される。

(1) 21か月のSethの発話

Get up （「起きるの」ときかれて）
Please （「ジュースほしいの」ときかれて）
Apple （「これはアップル・ジュース」の意）

- (1)' Daddy car（これはあいまいな表現で、(a) That's daddy's car. (b) I here daddy coming in his car. (c) I want to take me in his car. といったような、いろいろな解釈が可能である。）

そして、(5) の例として以下のような会話が収められ、以下のような説明がついている。

(5) 27か月のSethの発話

Where'd the ball go ? Where's the ball? There's Geoffrey, ……
I saw Robert, and saw Kevin, and saw Luanna.

これを(1)と比べた場合、この六ヵ月間における変化は急激と呼ぶより他はない。まさにシンタクスは突如として出現したと言えよう。しかも、この六ヵ月間の断層は、じょじょに積上げ方式で埋められたのではなく、突然の飛躍によって超克されたと考えられる。

「シンタクスは突如として出現した」という意見には筆者は賛成しかねる。現在2才4ヵ月になる筆者の息子もつい数ヵ月前は、

「ボーユ(ボール)」としか言えなかったのが、ここ1ヵ月で

「ボーユ あっち いった」

「ボーユ ない」

「ボーユ ジジ 持ってゆ」

「ボーユ 持って 公園いこー」等

急にそれが文の形態を整えてきた。しかし、「ボーユ」としか言えなかったころでも、顔の表情・身振り・声の調子等で、ボールに関して何がしたいのかは、充分こちらに伝わってきていた。即ち、頭の中ではシンタクスは伴っていたのだが、それを発話する程の細かい舌の動きが伴っていなかっただけの話である。

「小さい時から、積木をつませたり、ひもにビーズを通したり、はしを持たせたりしなさい。細かい指先の仕事をさせる事が、運動神経・脳の発達につながる」とは育児書によく書いてある事だが、子供は細かい指先の動きが出来るようになるのと同時期に、舌も細かい動きが出来るようになって、ある程度長い文が発話出来るようになるのだ。(男子が女子よりも言語面の発達が遅いのは、細かい作業がにがてであるというこの事実に関連しているように思われる)従って、頭の中ではsyntaxがあってもそれを発話出来ない、という時期が幼児期にある。言語資料の採集という事は、出来ないで立証する事は不可能だが、それはまぎれもない事実である。息子を例に以下で論じてみよう。

まず発音に関してだが、幼児にとっては、舌の細かい動きというものはなかなか困難な問題であり、皆、その子なりに発音しやすいように言葉を短縮してゆく。

始めに発音できるのは、一音節の言葉。従って、ボールはポー、車はブーとまるで“英語”のよう。次に二音節の言葉だが、パパ、ママと同じ発音を繰り返すのは問題ないが、「ムシ」「フロ」「ブドー」のように異なる発音は難しいらしい。一般的には、このような場合は、始めの一音節(ムシなら「ム」)或いは後の一音節(ムシの「シ」)で代表させるようだが、我が息子の場合は、前の音節の子音と後の音節の母音をくっつけて発音していた。「ムシ」「フロ」「ブドー」はそれぞれ「ミ」「フォ」「ポー」で、何を言おうとしているのか、察するのに一苦勞であった。三音節の言葉となると、主に一音節に省略する法、即ち「リンゴ」「イチゴ」も共に「ゴ」で、時に前後をくっつけ

る法も導入して、「メガネ」を「メゲ」等と発音していた。後ろの母音に影響されて前の母音に変化する現象は長く続き、いろいろしゃべれるようになっても「ください」を「カダシャイ」等話していた。

Syntaxに関して言えば、最初は〇〇アル、〇〇ナイ、〇〇ネンネ等位の述語しかいえなかったのだが、ある時急に動詞の数が増えて、「泣く、笑う、歌う、食べる」等、生活に密着した事なら大抵話せるようになった。勿論、発話出来なくても理解できる語彙はずっと数多くあった訳だが、これも発音の問題であろう。今は、否定文も、命令文も、条件文（カエッタラ、イヤ。タベタラ、イク等）も、ほとんど自由に使いこなせるようである。勿論、否定語の作り方は「動詞+ナイ」をまず試すので、「行カナイ」を覚える迄は「行クナイ」等、語彙的誤りはまだ数限りないが、それでも一度「行カナイ」を把握すれば、次からはほとんど間違える事なくそちらを使用している。一度記憶されたものは、すぐに応用がきくようである。

言語中枢がどのように形成されていくのか知らないが、幼児の言語習得も言語的な面からだけでなく、いろいろな運動神経の発達等と関連性をもって調査していかねばならないと思う。例えば、おはしを使えるようになるとか、おしっこの自立とか、階段から足をそろえて跳べるようになるとか、様々な事が幼児にとっては言語獲得と同様に重要な事であり、同様に学んでいかなければならない事である。又、それらの行為は一見無関係な互いに独立した事柄のようだが、実際には、もっと深いところで関連しているように感じる。例えば、満一才の頃、子供は歩き始めるのだが、ちょうどその頃から、いろいろな事を記憶しだし、内面的にも複雑になり、急に人間らしくなっていくのである。であるから、幼児の言語獲得について幼児を informant として研究しようとする者は、単に言語活動だけでなく、それ以外の日常生活の上での様々な出来事をも調査し、全体像をつかんでいかねばならないと思う。

8. 結 語

Generative grammarは言語を理論的にとらえようとするあまりに、実際の言語活動から離れていってしまうくらいがあるように思う。現在のGB理論は、変形操作にたよっていた初期の理論よりは抽象度は高いとはいえ、「言語の普遍性」を扱うには、まだ不備な点が多い。もし「言語の普遍性」とか、「生得的な言語習得機能」の解明というものその究極の目標におくならば、やはり実際の言語活動にももっと目を向ける必要があるように思う。その場合、私の体験からして、bilingual childrenが informant として、いろいろ役に立つのではないだろうか。私自身としては今後そのような方面の研究に注目していきたい。

参考文献

- Chomsky, N. (1981). Lectures on Government and Binding, Foris, Dordrecht.
Chomsky, N. (1985). Knowledge of Language : Its Nature, Origin and Use.
New Yorker, Praeger.
Chomsky, N. (1986). Barriers, The MIT Press.

- 今井邦彦(編)(1986)『チョムスキー小辞典』大塚館書店
今井邦彦(1986) 「チョムスキー批判の現状」
『言語』1986, 12月号 pp. 52-61
井上和子(1986) 「日本語分析からみたGB理論」
『言語』1986, 12月号 pp. 72-82
梶田 優(1986) 「チョムスキーからの三つの分岐点」
『言語』1986, 12月号 pp. 96-104
中島平三(1985-1986) 「モジュール文法の展開(上・中・下)」
『言語』11月号- 1月号
中島平三(1986) 「GB理論の特異性と新たな展開」
『言語』12月号
長谷川欣佑(1983) 「文法の枠組-統語理論の諸問題」
『言語』5-10月号
長谷川欣佑(1986) 「チョムスキー理論の成果と展望」
『チョムスキー小辞典』第10章 大塚館書店
長谷川欣佑(1986) 「境界理論としてのBarriers批判」
『言語』12月号 pp. 84-94